

日吉台地下壕保存の会会報

第83号
日吉台地下壕保存の会

2007年度総会開催さる

敗戦から62年目の今年の本会総会は2007年5月19日(土)午後1:00より慶應義塾大学日吉キャンパス藤原記念館大会議室において開かれました。

「新たな戦争遺跡を作らない、戦争の実相を知るために戦争遺跡の保存を」という本会の大きな課題を解決するため、昨年度の活動報告と決算、また今年度の方針とその裏付けとなる予算について話し合われました。一昨年の神奈川新聞社会事業賞受賞、ガイド養成講座開催、ガイドブックの発行という大きな取り組みを経て、ガイド養成講座の参加者の中から会の運営に参加してくださる方も次第に増えてきています。この3月にも出されると予想された文化庁から戦争遺跡の詳細調査報告は遅れ、遅れになっていますが、会の活動は少しずつ広がりが出てきました。総会ではこれまで「夢」だった「平和資料館」の取り組みを「希望」に変えて、前向きに取り組んでいくことが方針として確認されました。

総会に先だって、慶應大学経済学部名誉教授白井厚先生による講演が行われました。講演の要旨及び総会で決定された事柄を以下に掲載いたします。

2007年度 第19回
日吉台地下壕保存の会定期総会
13:30~16:30

- 講演会 13:30~15:00
「諸大学における戦没者の追悼」
—慶應大学にふさわしい
追悼のかたちを考える—
講師 白井 厚 氏
- 総会
総会次第
 1. 開会の辞
 2. 会長挨拶
 3. 議長選出
 4. 議事
 - (1) 2006年度活動報告
 - (2) 2006年度会計報告
 - (3) 2006年度会計監査報告
 - (4) (1) (2) (3) の報告についての質疑応答及び承認
 - (5) 2007年度 会長・副会長・運営委員・会計監査の選出と承認



講演 白井 厚 氏

- (6) 2007年度 活動方針案説明
- (7) 2007年度 予算案説明
- (8) (6) (7) の活動方針案、予算案の質疑応答及び承認
- 5. その他
- 6. 議長解任
- 7. その他連絡事項
- 8. 閉会の辞

(1) 2006年度活動報告

2001年4月に慶應義塾が地下壕を整備して以来、見学者を安全に案内できるようになった。今では団体見学会や毎月第4土曜日の定例見学会には、小学生から中・高年まで幅広い年齢層の人々が数多く参加している。地下壕見学が児童・生徒の「調べ学習」や「平和学習」として定着化し、今年度は小学校6校、中学校2校、高校3校、大学3校及び留学生を案内した。立命館大学国際平和ミュージアムからはツアーを組み見学された。慶應義塾OBの見学希望者も多数見学された。

保存の会としては年々増加する地下壕見学の希望に対応できるよう、昨年よりガイド養成講座を開き、多数の受講者の中から現在2名の方が見学会のサポート実習を行なっている。第2回ガイド養成講座(2006.10.21～2007.1.20まで4回)からも3名が見学会のサポートに参加している。

ガイド養成講座は港北区の「港北ふるさとサポート事業」(愛称「ふるサポ」)に応募、6月17日の公開提案会「港北学び舎」

(16団体参加、慶大来往舎)に於いて、「ピースロードふるさと港北 part2」の事業名で提案、助成金12万円(後に1万円返納)を受け、『戦争遺跡を歩く 日吉』を増刷。

「2006日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」を実施。2007年3月17日の活動報告会・交流会をもって本年度の事業を終えた。

2003年より準備に取りかかっていた「学び・調べ・考え方 フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕」(平和文化)が完成にこぎつけ、8月15日刊行した。それに先立ち8月4日横浜市市庁舎記者クラブで記者会見、8月中旬の神奈川、日経、産経新聞などに紹介記事が掲載された。

8月19日～21日第10回戦争遺跡保存全国シンポジウム群馬大会(水上温泉・松の井ホテル)には8名が参加し、分科会で保存活動について発表した。

11月18日、日吉台小の「日吉台フェスティバル」を見学。6年生は「日吉温故知新～今わたくしたちに伝えられること～」として「戦争と子どもたち～戦時中の学校、子どもたちについて調べました～」と、日吉台小学校、日吉台地下壕等の調査結果を展示、体育館では学童疎開の話が劇化され、発表された。

11月21日～25日第14回「横浜・川崎平和のための戦争展」を慶大来往舎ギャラリー、会議室で開催。テーマは「日本人の戦争観を問い合わせなおす」。展示・イベントがあり多数の来訪者があった。

12月4日、立命館国際平和ミュージアム「安斎育郎先生と行く平和ツアーin神奈川」の26名が地下壕を見学。交流会では安斎氏の教育基本法など時局に合わせたミニ講演があり、慶大



の地下壕見学に対する方針や保存の会の現状を説明する有意義な時を過した。『2006年安斎育郎先生と行く平和ツアーアin 神奈川 12月4・5日』 冊子31pを頂き、後にツアーアの『感想文集』冊子8pをお送り頂いた。

卒業を目前にした学生ガイドの杉山氏がホームページを更新する原案を作成。近いうちにお目見えする予定である。

2007年度も「ふるサポ」事業に応募、『戦争遺跡を歩く 日吉』の増刷、「2007日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」を実施し、一人でも仲間を増やしたいと願っている。又『学び・調べ・考えよう フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』の増刷も予定されている。

日吉台地下壕保存の会

- ◆会員数 339名、8団体。
- ◆定期総会開催： 第18回 2006年6月10日
- ◆運営委員会開催： 7月5日～2007年5月11日 12回
- ◆会報発行： 4回 第79号(7.5) 80(9.15) 81(2007.1.17) 82(4.20)
- ◆地下壕見学会： 53回 5.31～2007.4.28 参加者：2685名（小・中・高：1077名、大：232名、一般・定例：1376名）
- ◆港北ふるさとサポート事業： 3回（港北区全体会） 6.17 11.23 2007.3.17
「2006日吉の戦争遺跡ガイド養成講座」：4回 10.21 11.18 12.9 2007.1.20
『戦争遺跡を歩く 日吉』増刷
- ◆ ブックレットの発刊
『学び・調べ・考えよう フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』監修白井厚、日吉台地下壕保存の会編 平和文化 2006.8.15刊
- ◆第10回 戦争遺跡保存全国シンポジウム群馬大会 8名参加
日時：8.19～20 会場：水上温泉・松の井ホテル 21：フィールドワーク
分科会報告
第1分科会「保存運動の現状と課題～戦争遺跡保存全国シンポジウムの9年間～」新井揆博
「2005年度の活動 地域・公立小学校・行政とのかかわりを中心に」亀岡敦子
第3分科会「戦争遺跡の活用と次世代への継承のために～助成金事業応募と日吉台地下壕保存の会の活動～」岩崎昭司、喜田美登里
- ◆ 慶大日吉キャンパス自然観察会 10.1 案内：日吉丸の会
- ◆ 慶大矢上キャンパス防空壕調査 10.8
- ◆ 慶大日吉寄宿舎同窓会「寮和会」と懇談 10.15
- ◆ 第14回横浜・川崎平和のための戦争展「日本人の戦争観を問い合わせる」
日時：11.21～25（20日準備、23日休館） 会場：慶應大学日吉キャンパス来往舎
主催：横浜・川崎平和のための戦争展実行委員会、日吉台地下壕保存の会
展示：①戦中・戦後の教科書（特別展示）「墨塗教科書」「満州国で使われた教科書」
②神奈川県の戦争遺跡 写真と地図、③慶應義塾大学日吉寮と谷口吉郎 写真と説明、
④沖縄と日吉をつなぐ作戦電文、⑤市民が描いた戦争の記憶、⑥成田富男作「満蒙開拓青少年義勇軍とシベリヤ抑留の体験をつたえる」紙芝居と実演
講演・シンポジウム 11.25
第1部：シンポジウム「戦争観と追悼について考える」 韓国、ドイツなどからの留学生や日本人など、戦争を知らない世代による意見交換
第2部：ひとり語り「下級兵士がみた沈没 戦艦武藏の最期」富田祐一氏（青年劇場俳優・方言指導）

第3部：記念講演「靖国神社と憲法」田中伸尚氏（ノンフィクション作家、慶大卒）
 事前事業 ①平和のための戦争展実行委員会 3回 7.20、10.3、11.14。 ②絵画教室
 10.29 於日吉地区センター。 ③靖国神社見学ツアー 11.12。

(2) 2006年度 決算報告 (単位 円)

費目	2006年度予算	2006年度決算	備考
【収入の部】			
会費	220,000	474,000	現金 67,000円、振込み 407,000円
見学会資料代	250,000	590,840	内訳別項
図書等頒布	0	112,700	
寄付金等収入	0	14,321	
繰越金	486,122	486,122	
計	956,122	1,677,983	
【支出の部】			
運営費	150,000	119,922	各種会合・打合せ等
事務費	70,000	50,516	事務用品費等
印刷費	30,000	64,639	会報・資料等
通信費	170,000	222,940	会報郵送費
資料費	30,000	18,460	書籍・資料等
頒布図書購入費	50,000	85,361	
交流・交通費	100,000	117,599	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	100,000	0	講演・学習・調査等
予備費	256,122	191,100	冊子 2000部
計	956,122	870,537	
差引残高		807,446	

見学会開催費用内訳

収入の部	支出の部	保険料	244,320
見学会費用	981,460	振込手数料	6,300
		案内経費	140,000
		※資料作成費	590,840
合計	981,460	合計	981,460

※資料作成費は2006年度決算の見学会資料代に計上しています

以上の通り報告します

2007年5月17日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子 印

この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子 印

会計監査 山口 園子 印

(3) 2007年度日吉台地下壕保存の会

運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会長 大西 章
 副会長 新井 摥博 鈴木 順二

運営委員	岩崎 昭司	上野 美代子	大久保 隆	岡上 そう
	亀岡 敦子	喜田 美登里	桜井 準也	杉山 誠
	鈴木 高智	谷藤 基夫	常盤 義和	都倉 武之
	富澤 慎吾	中沢 正子	中谷 俊吾	林 ちづ
	古川 晴彦	宮本 順子	茂呂 秀宏	渡辺 清

会計監査 熊谷 紀子 山口 園子

顧問	永戸 多喜雄	鮫島 重俊	白井 厚
	東郷 秀光		

(4) 2007年度活動方針

1989年に日吉台地下壕保存の会が発足して、今年で19回目の総会を迎えます。この間会員の方々、全国の戦争遺跡保存運動に携わっている方々、日吉地域住民の方々とともに活動を続けることが出来ました。

今年は憲法施行60周年の年にあたり憲法について改憲を含めた議論が多く見られます。その中で『戦争を知らない』40、50代より『戦争をまったく知らない』20、30代の方に改憲賛成が多くいます。この議論の中で欠落していることは、戦争の実相について正確に伝わっていない状況で判断を求められていることです。テレビなど映像などからしか戦争の情報が伝わらないことに問題があります。これまでの活動は主に地下壕の保存に力が注がれていましたが、しかし、これからはこのこと以外にも実物の『モノ』を通じて戦争の実相を語れる人の発掘・養成が重要になってきます。またそれと同時に語れる場所と語る資料の調査・収集とその保存できる場所が必要になってきます。平和資料館の建設が大きな課題となります。

今年度は今までと同様に、小・中・高校生を始めとする多くの方々に対して見学会の開催、それをガイドする方々の養成、そして新たに資料の調査・保存が出来、またこの活動の拠点となる日吉台地下壕平和資料館の建設に向けて活動をしていきたいと考えています。

そのために以下の活動方針を提案致します。



活動方針

- 日吉台地下壕及び関連施設の整備・活用方法を考え、その実現に努力する。
- 日吉台地下壕見学会の内容を充実させ、より頻繁に開催する。
- 小・中・高校生のための見学会を開催していく。

- 日吉台地下壕の学術調査・研究及び学習会を開催する。
- 日吉台地下壕平和資料館建設を目指し、実現に努力する。
- 港北区住民の方を始めとする地域の方々と協力して保存運動を進める。
- 慶應義塾・横浜市・県・国への働きかけを地域の方々と連帯して行う。
- 全国の戦争遺跡保存運動の会との連携を深め、保存運動を盛り上げていく。
- 運営委員会の活動の充実と強化をはかる。

(5) 2007年度 予算 (単位 円)

費目	2007年度予算	備考
【収入の部】		
会 費	250,000	
見学会資料代	400,000	
図書等頒布	0	
寄付金等収入	0	
繰 越 金	807,446	
合 計	1,457,446	
【支出の部】		
運 営 費	150,000	各種会合・打合せ等
事 務 費	70,000	事務用品費等
印 刷 費	80,000	会報・資料等
通 信 費	200,000	会報郵送費等
資 料 費	30,000	書籍・資料等
頒布図書購入費	80,000	
交流・交通費	150,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝 礼	30,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	300,000	
予 備 費	367,446	
合 計	1,457,446	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました

2007年5月19日

日吉台地下壕保存の会

運営委員会

(6) 講演 「諸大学における戦没者の追悼」

—慶應大学にふさわしい追悼のかたちを考える—

講師 白井 厚 氏

追悼とは

追って悼むと書く追悼とは、死者を偲んで心を痛める、嘆き悲しむことで、その核心は「愛と記憶と悲しみ」である。教育の基礎は学生に対する愛であり、愛の対極にあるものは憎悪ではなく「無視」や「忘却」であるから、侵略戦争においてであっても、学生の戦没に対してはまずこれを記録し、その死を悼むべきだろう。



大学によって多種多様

第2次世界大戦の頃、日本における大学は47校位、ほかに旧制高校や専門学校からも軍隊に行って戦没した人が大勢いた。これらが当時の高等教育機関で、ここで学べたのは当時は同一年齢層のうち約3%位、大変なエリートである。大学の大きさも様々で、学生数が多い順でみると、東・早・慶・日・京・明・法・中……となる。学部構成、校風、学長のリーダーシップなどによって追悼の仕方は多様だが、全体として大略次のような流れを見ることができるであろう。

追悼式・慰靈祭—対象者明示・戦没者名簿作成—募金・祈念碑建立—調査の進展—記名(刻名)碑建立—研究成果出版—反省—啓蒙・教育

これをすべて行った大学はないが、敗戦の翌年に慰靈祭を催したのは南原繁が総長となった東大。南原は終戦工作を行ったので特別な思いがあった。戦没者名簿を作り始めたのは中大が早く、'69年には小樽商大は卒業生の有志が戦没者慰靈記念塔を建てた。独立した建物を作ったのはここだけであろう。'80年代になると関西大・明・中・早・一橋大などが創立百年を祝う関係で続々と戦没者名簿を発表した。大学自体が立派な研究書を出したのは、東・立・京大である。卒業生組織としては、一橋大学の如水会が活発で、'89年には『戦争の時代と一橋』という歴史書を刊行、'94年には「学徒出陣」で1268名が入隊し87名が戦没したと発表してその氏名を如水会館に掲額、更に1300万円を募金して'00年には大学に慰靈碑を、更に'01年には807名の記名碑まで建てた。卒業生の組織が研究、祈念碑建立、名簿作成、記名碑建立のすべてを行ったのは、如水会だけである。

教師と若い世代のグループが調査・研究を行ったのは、青山学院の雨宮剛教授を中心とするプロジェクト95で、そこで発表した6冊の本は圧巻である。私のゼミの共同研究も3冊の本と2224名の戦没者名簿を公刊したので、この自主製作グループに入る。



慶應義塾にふさわしい追悼

反封建、反官僚、独立自尊、平等を掲げた福沢の影響下にある塾は、自由な私学とみなされて陸軍からにらまれ、また最大の戦災被害校でもあった。従って塾における追悼は、軍国主義や全体主義、国家主義、戦争に反対し、また官僚的でなく、政治的でなく、宗教的でなく、学問的、教育的、

歴史尊重的なものが望ましい。しかも塾は、日吉の予科校舎（現在の高校）を海軍に貸与し、そのためそこが海軍の中枢基地となり、そのため戦後は直ちに米軍に接収されるなど、惨憺たる状況に追い込まれたのである。この歴史を忘れてはならない。

そこで、このような塾の特殊な状況を生かした追悼（＝戦没者を忘れず、戦争体験を正確に後世に伝え、かかる悲劇の再来に対して警告し、戦争の歴史を語る遺跡を保存し、内外に大災害をもたらしたこの時代の研究を促進すること）が必要である。

しかも連合艦隊司令部（後に海軍総隊司令部）が置かれた日吉寄宿舎は、本誌前号に中澤さんが書いたように建築家谷口吉郎の初期の代表的作品。日吉の地下壕は、戦争遺跡として広島・長崎・沖縄に次ぐというだけでなく、大学と直結した唯一の重要な戦争遺跡でありました貴重な建築美術作品と立体的に結合した戦争遺跡なのである。

長い歴史のある欧米の大学を訪れると、必ず目にするのがその大学の卒業生戦没者の刻名碑であり、また各種の博物館である。慶大には、残念ながらこの二つともない。それどころか建築史上著名な谷口作品は、廃墟に近い。そして大勢の学生は、戦争のことも谷口作品の価値も知らぬままに卒業して行く。誠に“もったいない。”

そこで改めて次の提案をしよう。寄宿舎の外装は修復して保存し、内部をアジア太平洋戦争下の塾生生活、および連合艦隊司令部の状況などを示す戦時博物館とする。そしてそこから地下壕の作戦室などへ直行する階段を復元し、地下壕見学のオリエンテーションの場および入口とする。寄宿舎は表面は建築史の、内部は地下壕と一体となった戦争博物館の建物として珍重され、付近は自然を生かした公園や考古学研究、建築史研究の場としても活用できるのではないか。日吉のこの一画は、創立150年目にふさわしい歴史を語る場として再生するであろう。



第11回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京大会のご案内

今年は一橋大学で開催 多くの方の参加を！

大会テーマ 戦争の記憶と今日の歴史認識

—東京の戦争遺跡を通して歴史と平和を考える—

主催 戦争遺跡保存全国ネットワーク

第11回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京大会実行委員会

会場 一橋大学 国立東キャンパス・西キャンパス

〒186-8601 東京都国立市中2-1 Tel042-580-8000

JR中央線国立駅南口徒歩6分又はJR南武線谷保駅徒歩20分(バス便有)

日程 8月17日(金)

13:00~16:30

フィールドワーク・プレAコース(地下鉄「九段下駅」6番地上出口集合)

しょうけい館(戦傷病者資料館)、靖国神社・遊就館

8月18日(土)

11:00~12:00 会員総会 (東1号館1101教室)

昼食

13:00~17:30 開会行事・全体集会シンポジウム (東2号館2307教室)

基調講演 「現代日本における戦争の記憶と戦争責任問題」

吉田 裕(一橋大学大学院社会学研究科教授日本近現代史)

報告 「小笠原・硫黄島の戦争遺跡の実態」
安島太佳由 (写真家)
「扶桑版教科書を使っている東京杉並区での取り組み」
鈴木織恵 (ひらかれた歴史教育の会)
「戦争遺跡保存運動の到達点と課題」
戦争遺跡保存全国ネットワーク・平和運動・戦争遺跡保存に関する報告 (会場からの発言を含む)
18:00~20:00 交流会 東プラザ生協食堂大ホール

8月19日(日)

9:00~15:30 分科会
第1分科会 「保存運動の現状と課題」
:各地で展開されている保存運動の成果・現状と課題を報告・交流する分科会 (西本館 31 教室)
第2分科会 「調査の方法と保存整理の技術」
:調査方法や保存整備の技術など、他の専門機関と協力連携を含めて報告・交流する分科会 (西本館 36 教室)
第3分科会 「平和博物館と次世代への継承」
:各地の平和博物館・資料館つくりやその見学などを通して、何を伝え、何を受け継ぐのかを報告・交流する分科会 (西本館 26 教室)
特別分科会 「軍都東京の戦争遺跡」
:帝都東京には、宮城を守るための軍事施設や陸軍の主要機関が沢山置かれていました。また、この3月、東京大空襲の被害者が国に損害賠償などを求めた訴訟が提訴されました。戦争遺跡から見た東京像について、報告・交流する分科会です。 (西本館 21 教室)

16:00~17:00 全体集会・閉会行事 (西本館 21 教室)

8月20日(月) フィールドワーク 9:00~16:00(コースによって~15:00)…各コース定員 25人

Aコース しょうけい館 (戦傷病者資料館)、靖国神社・遊就館
Bコース 女たちの戦争と平和資料館、わだつみのこえ記念館、東京大空襲戦災資料センター
Cコース 旧陸軍省・東京裁判法廷、青山練兵場、軍用停車場跡、「出陣学徒壮行の地」碑他
Dコース 東大和立川飛行機変電所、中島飛行機三鷹研究所、調布飛行場掩体壕、浅川地下壕

参加費 シンポジウム・分科会参加費 1800円 1日参加費1000円 高校生まで無料 交流会費 5000円 フィールドワーク参加費プレA、A・B・Cの各コース予価 500円、Dコース 3000円

参加を希望される方は資料をお送りしますので下記へご連絡ください
(申し込み締め切り 7月31日)。

◎問い合わせ先 亀岡敦子宛 TEL・fax 045-561-2758

書評

以下の書評は『ロバート・オウエン協会会報』のために書かれた文で、筆者の許可を得て転載しています

『フィールドワーク日吉・帝国海軍地下壕』

監修 白井 厚 日吉台地下壕保存の会編 (平和文化、2006年、62頁、本体600円)

飛矢崎雅也

今から溯ること63年前の1944年8月15日、現在は横浜市の静かな住宅街の一角にある慶應義塾日吉キャンパスである地下壕の建設が密かに始まった。旧帝国海軍連合艦隊司令部などがおかれた巨大地下壕である。日増しに戦局が悪化するなかで、海軍はその司令部を地下において、連合国軍の本土空襲や本土上陸に備えようとしたのである。

敗戦から62年。当時を知る人は確実に減り、戦争の記憶を伝える手段として戦争遺跡や資料が持つ価値はこれまで以上に重要になっている。このような状況を受け、全国各地でこうしたものを見学しようとする運動がなされている。こうした運動の一つとして、「連合艦隊日吉台地下壕の保存をすすめる会」(略称:日吉台地下壕保存の会)が1989年に結成されたが、本書はこの「日吉台地下壕保存の会」によって編まれた、「中・高校生や大学生、そして市民の皆さんに、修学旅行やゼミ旅行、また総合学習や自主的な平和学習に、さらに平和を考えるために個人やグループでこの地を訪れたときに役立つガイドブック(1頁)」である。さらには「日吉界隈の戦争遺跡、当時の関係者の証言も掲載(1頁)」されている。

章立ては以下の通りである。

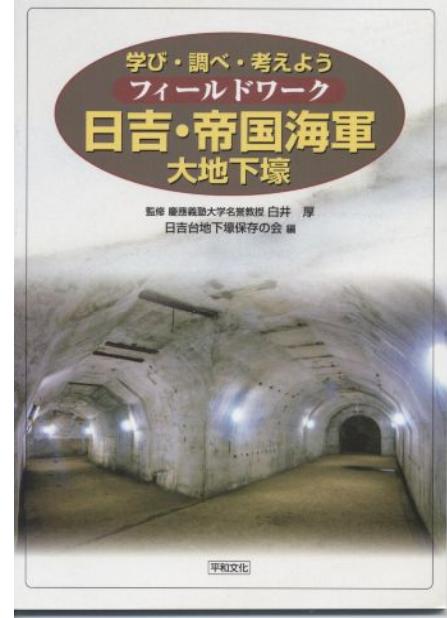
- 第Ⅰ章 慶應義塾・日吉の戦争遺跡を歩こう
- 第Ⅱ章 連合艦隊司令部の地下壕を歩いてみよう
- 第Ⅲ章 戦争末期の帝国海軍
- 第Ⅳ章 戦争遺跡のあるまち日吉
- 第Ⅴ章 近代戦争の拠点・神奈川

それでは、各章ごとに内容を見ていこう。

慶應義塾日吉キャンパスが建設されたのは1930年である。「手狭になった東京三田の校地から日吉に大学予科を移転させ、青少年の教育にふさわしい環境を整えよう」という『理想的学園』建設計画(3-4頁)」だった。しかし、31年に満州事変に始まる戦争が長期化すると、日吉キャンパスにも軍国主義の波が押し寄せ、教練、報国隊の結成、勤労動員と軍事色が強まった。そして41年12月8日、太平洋戦争に突入すると、学園の軍事体制化はいっそう強化され、43年11月19日には「学徒出陣」で日吉の予科からも約500人の生徒を軍隊に送り出したのである。その壮行会の会場となったのが陸上競技場だった。

その他、44年3月には第一校舎に海軍軍令部第三部(国際情報)が入り、さらに同年末には海軍省人事局や經理局も東京の霞ヶ関から移ってきて、校舎は兵舎になっていったのである。移転してきた軍令部第三部は、7月7日にサイパン島が陥落すると、日本本土への空襲を恐れ、第一校舎の南端から陸上競技場にかけて堅固な待避壕を建設した。

さらに、9月29日、学生のいなくなった寄宿舎に連合艦隊司令部が移ってきた。当時「東洋一」といわれたこの寄宿舎は、日本のモダニズム建築の開拓者であり、国立近代美術館な



ども設計した谷口吉郎の設計によるもので、コンクリート3階建て3棟に、最新式の床暖房、40の個室と全面ガラス張りの「ローマ風呂」、そして全寮に水洗式の便所を備えていた。このうち中寮の食堂は作戦室と幕僚事務室に当たられ、レイテ戦や特攻隊の出撃、沖縄作戦、戦艦大和の出撃など戦争末期の重要な作戦が、ここで決せられたのである。以上が第I章の内容である。

第II章では、連合艦隊司令部の地下壕に足を踏み入れる。1944年8月15日に建設が始まったこの地下壕には、完成した順に、11月頃から司令部や通信隊が入った。本章では、「連合艦隊司令部地下壕詳細図」が付され、壕内の様子が詳しく紹介されている。それによると、通路の所々に敷かれた鉄板の下には地下水の集排水マンホールがあり、通路の下には直径20センチメートルの土管が壕全体に張り巡らされ、自然換気も重視されて、壕内は注意深く設計されている。ここに、倉庫・発電機室・消音器室、連合艦隊司令長官の執務室、バッテリ室、食糧倉庫や電信室、暗号室、そして作戦室と、連合艦隊地下司令部の中核部分が集まっていたのである。

その中でも作戦室は幅4メートル、奥行き20メートル、高さ3メートルと、この地下壕では最も大きい部屋で、当時、民間では使われていなかった蛍光灯も取り付けられていて、真昼のような明るさだったという。

また、電信室には約40台の短波受信機が置かれ、戦艦大和が沈められていく様子、海軍地上部隊の戦況、さらに特攻機の通信も受信していた。この地下壕から、連合艦隊司令部は軍の絶望的な戦闘をかなり正確につかんでいたのである。

つぎに、現在非公開である軍令部第三部・航空本部・東京通信隊地下壕と海軍省人事局地下壕がそれぞれ紹介されている。前者については、現在もちあがっているマンション建設設計画に対する保存の取り組みの必要性の指摘が、後者については、約700人の朝鮮人労働者の存在の指摘が興味深い。

以上までを受け、第III章は、「日吉台地下壕」の主役である戦争末期の帝国海軍の戦いとその後の米軍による接收の様子が紹介される。1941年12月8日の開戦からいわゆる絶対国防圏の崩壊を経て、連合艦隊司令部が艦艇から陸上に置かれた理由やその場所が日吉だった理由、そしてその後の絶望的な作戦とそこにおける日吉の司令部の役割が述べられていて生々しい。粗雑な作戦計画、お粗末な情報収集・管理、そして無謀な戦闘による大量の戦死者。フィリピン戦線に送り込まれた陸海軍将兵およそ61万人のうち、その80%の約50万人が戦死したというのだから驚きである。こうした望みのない戦いのなかで、44年10月20日には神風特別攻撃隊（いわゆる特攻）が編成された。また、翌年4月25日には本土決戦のため、連合艦隊・海軍護衛総司令部・鎮守府・支那方面艦隊などを一手に指揮する海軍総隊が設置され、日吉にその司令部が置かれて、総司令長官が連合艦隊司令長官を兼ねることになった。総隊にまとめなければならないくらい、この時期に戦力は激減していたのである。しかしこうした戦況にもかかわらず、戦争は継続され、その形式として「特攻」が常態化し、航空攻撃はもとより、戦艦大和も水上特攻して撃沈された。当時、どんな戦艦でも戦闘機の支援がなければ無力であることは常識になっていたにもかかわらず、こうした作戦が“戦果を度外視して”決行されたことは、合理的な思考が求められる司令部において、狂信的な精神主義が蔓延っていたことを示している。そこには戦争を直視せず、兵士を顧みない司令部の姿があった。日吉はその舞台になっていたのである。本章には、特攻隊員が敵艦に体当たりする直前に発信する「ツー」という音が今でも耳に残っているという元通信兵の証言が生々しく収められている。

やがて45年8月15日の敗戦を迎えたが、そのあと日吉キャンパスに入ったのは、戦場や工場から戻った学生ではなく、占領軍の兵士とその家族だった。日吉キャンパスがすべて返還されたのは49年10月1日のことである。

つぎに第IV章では、日吉の歴史とともに日吉キャンパス周辺の戦争遺跡が紹介される。日吉台国民学校に入った海軍省人事局功績調査部、箕輪地区に入った海軍省艦政本部地下壕と、

日吉には当時の海軍の中枢部分が集まっていた。しかしそれはまた、この地域の住民たちの受難をも意味した。艦政本部地下壕の建設に当たり、周辺の農家は強制的に移動を命じられ、日吉は大きな空襲を3回受けた。空襲によって校舎を失った日吉台国民学校の児童は、戦後も青空教室で学習を続けた。空襲が多かったのは、この地区に海軍の中枢が集中することを米軍が知っていたからである。その他、大倉山の海軍気象部、川崎の海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊地下壕が紹介され、それぞれを保存する意味が述べられている。

最後の第V章は、神奈川県を近代戦争との関わりから捉える。神奈川県は近代になってから多くの軍事施設を抱えてきた地域である。

まず、太平洋に面していることから首都東京を防衛する拠点として考えられてきた。横須賀市の沖合に浮かぶ猿島は、首都防衛の役割を担った明治から昭和までの砲台跡を実際に目にできる貴重な遺跡である。

つぎに、侵略戦争の拠点としての役割を果たしてきた。江戸幕府から明治政府に引き渡された横須賀製鉄所は、1903年には横須賀海軍工廠と名を変え、200隻以上の艦船を建造して、海外への侵略戦争のための戦力を供給したのである。また三笠公園には、日露戦争時に連合艦隊旗艦となった戦艦「三笠」が保存されている。26年から記念艦として保存された「三笠」は、戦前は軍国主義宣伝の場として大いに利用された。

最後に、神奈川県は本土決戦の拠点として考えられた。アジア太平洋戦争の末期、県内には米軍の本土上陸作戦を迎撃するために多くの陣地が構築され、三浦半島には海軍による防衛体制が整えられて多くの特攻兵器が配備された。第III章に見た通り、当時の主力は特攻兵器となっていたのである。そして、こうした作戦の指揮を執っていたのが、日吉台の海軍総隊司令部であった。日吉の司令部は、本土決戦にかかる全海軍部隊の司令部となっていたのであった。そのことは、予想される米軍の上陸に対して神奈川県が前線基地となり、沖縄のように民間人を巻き込んだ陸上戦をすることを意味していた。しかしその時に、大本営は遙か後方の長野県松代に移るべく計画されていたのである。

以上が本書の内容である。このように本書は、風化しがちな戦争の記憶を継承することを目的に、貴重な戦争の遺跡を分かりやすく紹介した「ガイドブック」である。だが、決して通り一遍のものではない。「人間の生命の重みという問題(61頁)」意識の下に、「本書を持って日吉の地におもむき、戦争の歴史の現場に立ち、現場だからわかるなにかを感じほしいという願いを込め(61頁)」、平易な語り口、豊富な写真、詳しい図面や図表によって、書かれている。それが読者に迫るのである。また第IV章にあるように、戦争の遺跡という足場から自分たちの暮らす場を照射した地域史ともなっている。こうした内容が本書に単なるガイドブック以上の性格を与えている。

ただし、課題がないわけではない。たとえば、「日吉台地下壕」の建設には多数の朝鮮人労働者が働いていたと言われるが、それについてはわずかに触れられている程度である。しかし、本書でも「アジア太平洋戦争」という語が使われているように、先の戦争は日本一国に止まらない規模と影響を有した点に重要な特徴があるのであり、今後の研究はこの世界史的性格を抜きにしては進められない。実際、同時期に建設された長野県松代大本営地下壕は、強制連行された朝鮮人の強制労働にもスポットを当てながら解明が進められている。その成果は着実に実り、最近では韓国・済州島の旧日本軍施設を研究している学者や市民との連携が探られている。こうして、現地で人々が重ねてきた活動が、アジアの平和運動の広がりの一端を担っているのである。(『信濃毎日新聞』2007年1月1日)

こうして見ると、本書で扱う「日吉台地下壕」の価値も一層はつきりするだろう。アジアとの結びつきが深まる時代に、本地下壕は、アジア太平洋戦争の記憶を伝える遺跡として、世界史的な意味と重要性を持っているのである。それを考えるとき、ややともすれば戦争をめぐる人々の記憶が風化する今日にあって、本遺跡をわかりやすく伝える本書の意義は大きいのである。

特別寄稿

5月17日に行われた海軍兵学校78期（最後の在校生）相模会の連合艦隊司令部地下壕見学会に先立ち、当時、日吉における連合艦隊司令部将校（少尉）であった土方貞彦氏にお出でを願い、戦争に対する熱い思いを語っていただきました。下記の論稿はその時の講演要旨を白井厚先生を通し土方氏にお願いして寄稿していただいたものです。

海兵78期相模会の日吉地下壕見学にあたって

土方貞彦

私は慶應の予科2年の途中で昭和18年秋の学徒出陣の直ぐ後に海軍予備学生を志願し、19年1月より終戦の20年8月迄の1年8ヶ月を海軍の軍人として過ごしました。

20年1月に海軍少尉に任官、直ちに現地配属となったのですが、その配属先がこの日吉の連合艦隊司令部でした。そして20年4月の戦艦大和の特攻作戦の時、この司令部の地下壕の中で通信班担当将校として現地大和からの刻々の戦闘の悲痛な電文報告を受けとるという事態に遭遇致しました。

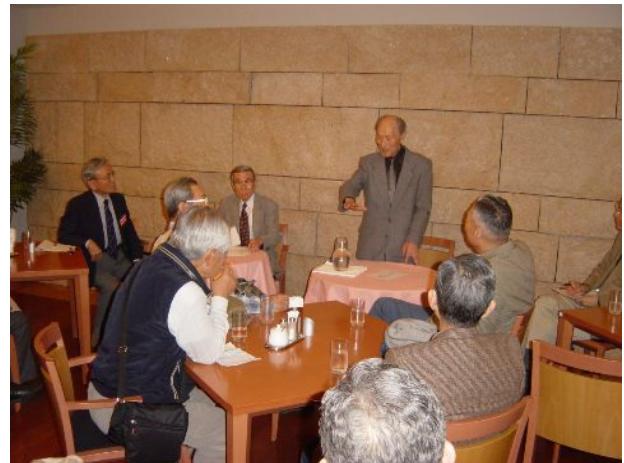
その戦闘の内容について詳細にお話しするつもりはありませんが、私も当時は軍国青年で、“戦争の愚かさ”などを考える余裕もなく、無我夢中の境地でした。過去の自分を振り返り、この事を含めて、戦争の事、特攻の事、戦死という事など、日本が辿って来た過去の歴史の事などを真剣に振り返り考えて見たいと思う様になったのは、実際はリタイア後の還暦以降の事です。そして調べれば調べる程、“日本の歩んで来た道には間違いが多かった”。そして我々国民は多くの悲惨な犠牲を強いられたという事が明白になり、これは絶対に繰り返してはならないと思う様になった次第です。

これから地下壕を見学される皆様、どうか私達戦中派の戦争体験者、そして私の様なこの地下壕での戦闘体験者のこれからお話しする事を念頭に置いてこの地下壕を見学される事を希望する次第です。

扱、日本の過去の歴史と言っても近現代史だけでも複雑で短時間に纏めてお話などとても出来るものではありませんが、少なくとも明治になってから明治政府は“富国強兵”を国是とする大日本帝国憲法や皇室典範、或いは教育勅語などを制定し、天皇を“現人神”として神格化するという様な宗教的思想の“国家神道”をつくり、この思想の元に国民を天皇の元に強力に統合する事とした。

この思想は昭和になってから特に陸軍の暴走を来たす結果となり、満州事変から満州国設立更には大陸進攻へと進んでしまう。この間昭和11年にはクーデターとも言うべき2.26事件を起こすという様な天皇の為でも国民のためでもない“暴徒集団”化してしまう。これらの一連の動きが太平洋戦争の素因ともなる訳ですが、太平洋戦争となると海軍抜きでは考えられぬ事、それでは一方の海軍はどうして居たのか。

“fleet in being not for battling”と言われて居た海軍、米英とは絶対に戦うべきではないと言って居た海軍、その海軍が何故陸軍の暴走を阻止出来なかつたのか。400隻の艦船26,000機の航空機、そして直接的には40万人の戦死者を短期間に投げ捨てる様に失った海軍、作家の司馬遼太郎をして“明治以来築き上げ



戦争の思いを語る土方貞彦氏

てきた貴重な日本文化遺産の喪失”とまで嘆かせた“日本の良識的海軍”その海軍が何故？という事になるが、それだけ曾(かつて)の海軍には“良識、人間性”が存在して居た筈である。原爆や無差別爆撃など含めればこの大戦の犠牲者は1000万人にも達すると考えられる。

極東軍事裁判の是非について云々する人々が存在するが、それでは誰がこの事態を裁く事ができたのか、多くの事がこの裁判によって明らかになった訳で、そういう点ではこの裁判はその後の日本にとって大きなプラスを齎(もたら)した事は否めない。

序でながら靖国神社問題が未だに解決の糸口すら見えて居ないが、この神社は極めて曖昧な日本人の宗教観の中で明治政府により創作されたとも言える前述“国家神道”、天皇を現人神として神格化し、この考えの元に從来から存在して居た招魂社を国家施設として格上げし特別官幣大社として、戦死者を国の犠牲者としてではなく“英靈”とし神として祀るというこの思想の元に作られた神社であり、政教分離などとは全く掛け離れた存在の施設である事は明白であり、東条以下の国を滅ぼし廃墟としてしまったA級戦犯達、国賊とも言うべきこういう人達を純粹な意味の戦死者と一緒に合祀してしまって居る現在の実態、これは戦死者を冒涜するものであり、第3者から指摘されるまでもなく我々日本人自身がその誤りを認め、直ちに少なくとも分祀は実施すべきものであり、靖国問題は歴史家が決めるべき事などと言う現総理の不勉強、認識不足は国家の指導者として全く失格であると思う。以上このほかにもお話ししたい事は山ほどありますが、時間の関係もありこの辺りで止めます。

要は“戦争はいけない”と口先だけで言うのではなくて、“史実と言うものを歪める事なくそして隠蔽する事なく正しく学び受け止めて反省し、二度と戦争などという愚挙により国民を不幸の渦に追い込まぬようにする事が我々戦後に生きる者の責務である”という事そういう事をこれらの戦争の遺跡は伝えて居るという事、そして多くの犠牲者がこの事を我々に訴えて居るという事をこの地下壕の見学に先立ち私が皆様に伝えたかった気持ちです。

我々日本人は兎角過去の事は忘れてしまう、臭い物には蓋をしてしまうという傾向が強い様に思う。これでは進歩はありません。歴史に限らず何事も反省が必要で、反省の上に進歩があるのだと思います。

拙い話になってしましましたが有難うございました。

お知らせ

この夏に企画された、二つの「平和展」におでかけください
(日吉台地下壕保存の会は展示、ミニトークなどに参加しています。)

「2007平和のための戦争展inよこはま」 展示と特別企画

見つめよう！語り合おう！戦争の過去といま 5月29日・横浜大空襲から62年
6月29日～7月1日 横浜駅西口 かながわ県民センター

展示 横浜大空襲他 約500点

特別企画 6/29 18:30～ 「横浜に眠る外国人たち」
7/1 13:30～ 中・高生たちと創る朗読劇「横浜の空襲と戦災物語」
講演「17歳の硫黄島」秋草鶴次さん

お問い合わせ 平和のための戦争展 in よこはま実行委員会 (045-241-0005)

「小さなまちの小さな平和展」 展示とミニトーク

7月9日～14日 東急線大倉山駅 ギャラリーかれん (045-543-3577)
日本の行く末、世界の行く末が気になるこの頃、「美しい国」よりも「やさしい心ある国」

になりたいと願う人たちが企画した草の根平和展です。貧困、飢餓、紛争、差別、環境、女性、子ども、福祉、憲法、教育、人権、経済のグローバリゼーション…などなど。

小さな平和展は、今私たちが知っていなければならない大切なことを学びあう場となることでしょう。

★ ★会場準備、展示物の搬入、会場での解説など、お手伝いしていただける方、ご連絡ください。
045-562-0443 喜田まで ★★



日吉台地下壕保存の会の公式HPが新しくなりました。
今年新しく運営委員になられた杉山誠さんがつくられました。随時更新していく予定です。よろしくお願ひします。

新アドレス <http://hiyoshidai-chikagou.net/>



地下壕紹介	保存の会よりお知らせ
保存の会について	2007年6月 サイトリニューアルオープンしました！
見学のご案内	今後もよろしくお願ひいたします。
会報バックナンバー	日吉台地下壕保存の会では、慶應義塾の許可を受けて毎月1回、定期見学会をおこなっています(一般公開はしておりません)。
保存の会入会ご案内 (工事中)	見学を希望される方は「 見学のご案内 」をご覧下さい。

●活動の記録 2007年 4月～6月

- 4/9 平和のための戦争展示 in よこはま実行委員会 (かながわ県民サポートセンター)
 4/20 運営委員会 会報82号発送 (慶應高校物理教室)
 4/28 定例見学会 15名
 5/11 運営委員会 (慶應高校物理教室)
 5/12 定例見学会 14名
 5/17 地下壕見学会 海軍兵学校78期会 23名 (見学の後、来往舎で土方定彦さん、白井厚さんの講演)
 5/19 2007年度総会 (藤山記念館会議室) 定例見学会 11名 (10:00～)
 5/24 運営委員会 (日吉地区センター)
 5/25 地下壕見学会 午前 セカンドライフクラブ 32名 午後 慶應義塾日吉・藤沢キャンパス職員他 24名
 5/26 定例見学会 24名 ☆5月は土曜日の見学会を3回実施しました
 6/16 特別見学会 靖国神社・遊就館見学 18名 (講師 東海林次男さん)
予定
 6/23 定例見学会 運営委員会 会報83号発送 (慶應高校物理教室)
 6/29～7/1 平和のための戦争展示 in よこはま (かながわ県民サポートセンター)
 7/9～14 小さな平和展 (アートかれん)
 7/21 特別見学会 登戸研究所見学 (申し込みは一週間前までに葉書かFAXで亀岡まで 223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 亀岡敦子 045-561-2758)

○地下壕見学会の予定

7/7 7/28 8/4 9/22 10/27 11/24

(8月21日～27日は大学事務が休みのため見学会はできません。)

☆☆地下壕見学会のガイドサポート参加のご連絡は見学会窓口まで。お待ちしています。☆☆

定例見学会は毎月第4土曜日に行ってています。なお日程が変わる場合もありますので必ず見学窓口に申し込んでください。(見学申込先 TEL&FAX 045-562-0443 喜田)

連絡先 (会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758
 (見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443
 ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/> (新アドレス)

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上
 発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 大西章 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会
 日吉台地下壕保存の会運営委員会